

月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



毎朝の体操で元気な暮らしを（下茨田健康体操クラブ）

特集 ラジオ体操でいきいき

● 体操から「まじわり」「見守り」へ ③

しもぼらだ
下茨田健康体操クラブ（宮城県亘理町）

● 毎朝の体操とウォーキングがもたらす、 ご近所づきあいの輪 ⑤

しょうげん
将監ふれあい体操会（宮城県仙台市泉区）

● 体操から始まる地区周辺の交流 ⑦

黒石崎老人会（宮城県多賀城市）

☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント

（島根大学 法文学部 福祉社会教室 准教授 加川 充浩さん）

まじわる災害公営住宅⑨

一般社団法人石巻じちれん（宮城県石巻市）

まちの仕組み⑭

仮設住宅から転居先までを支援 LSA配置で新たなまちづくりを
あと押し（宮城県気仙沼市）⑩

東北の元気⑫

あんでるせん（岩手県釜石市）

私の地域の元気興し「S-1グランプリ 第3回いがす大賞」⑫ ⑬

おおつちおばちゃんくらぶ（岩手県大槌町）

平成・向こう三軒両隣事情⑭

ご近所福祉クリエイション主宰 近所福祉クリエイター 酒井 保さん

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ⑮

暮らしを支える支援員⑯ ⑰

南三陸町戸倉地区災害公営住宅高齢者相談室（宮城県南三陸町）

特集

ラジオ体操で いきいき

多くの人が経験している、おなじみのラジオ体操。

健康のため、自分ができる範囲内で無理せず体を動かすだけでも十分に効果的です。

さらに言えば、ご近所さんたちでラジオ体操をするところへ足を運ぶだけでも、暮らしを豊かにする働きがあります。

一見するとラジカセから音を流して体操をするだけの集まりのように見えますが、参加者同士、顔を合わせれば会話が生まれます。

体操という簡単な接点からつながって、お散歩やお茶飲みまで活動が広がったり、見守り、支え合いにも発展します。

「元気の秘けつは体操仲間と会うこと」という人も少なくないくらいです。

ラジオ体操とともに、地域でのいきいきとした暮らしを支えている取り組みをご紹介します。



広い公園を存分に使って気持ちよく体操

体操から「まじわり」「見守り」へ

しもぼらだ
◎下茨田健康体操クラブ（宮城県亶理町）

ポイント

- 災害公営住宅で地域の住民とも交流が促進
- 支援活動から住民の習慣へ

2015年6月に入居が開始された、宮城県亶理町の下茨田南災害公営住宅では、平日の朝9時頃からラジオ体操が行われている。開始時刻の約10分前になると、敷地内にある公園スペースに、同住宅の入居者やもともとその周辺に住む地域の住民が集まってくる。

活動しているのは、地域住民が中心となって16年6月に結成された「下茨田健康体操クラブ」。もともと、同住宅入居者の健康や地域との交流を促進しようと、同町社会福祉協議会の支援員が働きかけて体操の機会を設けていた集まりだったが、参加者から、「自分たちが主体となって活動していかなければ」と声が上がリ、入居者・地域住民主体の活動に移行された。

1日は健康的なひとときから

ラジオ体操開始前、早く集まり出した人同士があいさつを交わしたり、おしゃべりをしたりと、わずかな

にぎわいが見られる。9時になると、公園で輪を描くように広がる。ゆっくり全身の準備体操をしてから、ラジカセから流れる音楽に合わせて体を動かす。

腕を挙げたり、足を上げたり、上体を下げたり、反り返らせたり、それぞれが無理のない程度に行う。足腰が弱っていたり、耳が遠くなっていたり、あまり激しく動けない人も、自分のできる範囲内で体操している。体操自体は一人ひとり行うものなので、周囲を気遣って無理をすることもない。継続的に参加している人たちは、「足が軽くなった」「やってよかった」と、健康上の効果を実感している。

ラジオ体操第1・第2が終われば解散になるが、せっかく顔を合わせたので、おしゃべりの時間になったりする。公園にはベンチもあり、腰を下ろしてくつろぐこともできる。おしゃべりに花が咲き、1時間近くその場で話し続けることもあるし、もっと運動をしたいと思えば、会話を楽しみながら住宅の周りを散歩する人たちもいる。



只野嘉邦さん(左)と今野昌男さん(右)

下茨田健康体操クラブ 代表 只野 嘉邦さん

「孤立・孤独死を防ぎ、コミュニティを広げてもらいたい」

参加人数はいつも40人ほどだが、少しずつ増えてきていて、最大で50人以上が集まった日もある。男性はなかなか家から外に出たがらないと言われることもあるが、ラジオ体操参加者の約10人は男性。夫婦揃って参加する人たちもいる。

周辺の住民は、だいたい歩いて5〜10分で自宅から同住宅に着ける距離に住んでいる。同じ災害公営住宅の入居者同士でさえ、もともと顔も名前も知らない間柄の人が多く、ラジオ体操の集まりを通じて新たに知り合い、友人関係を築くことも多い。

いつもの参加者同士、朝に会うことができれば、相手の体調が見てわかる。また、いつもいる人が顔を見せなければ、話し合い、あとで家まで様子を伺いに行くこともある。

**地域の役員らも体操を
まちづくりのきっかけに**

参加者のなかには、地域の役員などを務めている人もいる。同住宅を含む、



下茨田南災害公営住宅

周辺地域の自治会「巨理町

下茨田南区会」会長の今野昌男さんは、「災害公営住宅に引っ越して、引きこもってしまう人もいるようにだけど、住まいから出て、いろいろな活動に参加してほしい。この住宅の私たちは、入居して1年そこそこ。コミュニティづくりは、まだまだこれから」と、地域づくりをともに進めようと意気込む。

「孤立・孤独死を防ぎ、コミュニティを広げてもらいたい」と語るのは、クラブの代表の只野嘉邦さん。民生・児童委員も務めていて、同住宅や近くにある他の集合住宅など、

500戸近くを担当し、特にひとり暮らしの高齢者の見守りに力を入れている。毎週、同住宅内の16世帯を訪問し、健康上の問題がないか、不便なこと、不安なことがないか伺っている。

只野さんが訪問するときには、ラジオ体操に参加してみないかと誘うこともある。声かけの成果もあり、訪問先のうち、4人ほどがラジオ体操に出て来るようになった。

社協主導で体操をしていた頃、支援員が来られない日でも住民だけで体操ができるよう、あらかじめ只野さんがラジカセを預かり、代わりに音楽をかけることもあった。「社協のサポートがなくても住民主体でうまく実施できるように、いつも集まっているメンバーでよく話し合っていた」と、只野さんが話していたのが16年5月のこと。それから1か月も経たないうちに、クラブが立ち上げられた。

きは、下茨田南区会の集会所を使用するようにしている。入居者の集まりを地域の集会所で行えば、住宅敷地外に足を運ぶさっかけになる一方で、住宅内で住民が集まる機会がどうしても少なくなってしまうが、住宅敷地内でラジオ体操を継続し、短い時間でも敷地内に毎日集まることで、参加していない入居者にも雰囲気は伝わり、交流に向けた一歩を踏み出しやすい。

ラジオ体操を通じて、地域住民と親しくなった入居者のなかには、老人クラブの交流会など、地域の催しに参加するようになった人もいる。ラジオ体操で知り合った人がかけ橋となつて、ふれあいを広げる。

清

DATA

下茨田南災害公営住宅

宮城県巨理町下茨田52-1
3階建て1棟、4階建て2棟の計
3棟で125世帯が入居。



将監8丁目のふれあい公園でのラジオ体操

毎朝の体操とウォーキングがもたらす、 ご近所づきあいの輪

しょうげん
◎将監ふれあい体操会（宮城県仙台市泉区）

ポイント

- 会則も会費もない。毎日、誰もが気軽に参加できる健康増進の場。
- 毎朝、近隣の人と顔を合わせて交流する時間が、地域生活を豊かにする！

朝6時半前。仙台市泉区将監8丁目のふれあい公園に、少しずつ人が集まってくる。「ラジオ体操」と書かれた青い旗を目印に、30〜40人ほどが集合。男性も女性も声をかけ合い、あちこちで立ち話が始まる。世話人が、ラジオを定位置に設置しNHKの放送を流すと、ラジオを囲む形で広い円となり、手慣れた様子でラジオ体操第1と第2を行う。散歩中の愛犬とともに体操に混ざる人も。みんな、「イッチ、ニイ、サン、シ」と朝から声を出せば、さらにすがすがしく、気持ちがいい。

会則はない。会費もない。雨が降らなければ毎日実施。誰もが自由に参加できる場だ。

10年以上前に、住民2人で始めたラジオ体操は、犬と散歩中の人に加わったり、夏休みに子どもたちが参加するなど、少しずつ仲間が増えてきた。旗やラジオを設置する世話的なメンバーも自然に誕生。さらに、2013年に発足した将監地区社会福祉協議会のあと押しを受けて、

いまでは団地内8か所でラジオ体操が行われるまでに発展した。

将監団地で最初にラジオ体操を始め、周囲から「会長」と呼ばれるようになった桜井享俊さん（82歳）は、「誰もがふらっと参加でき、個々の等身大の体力で無理なく体操できるのがいい。なにより、朝からみんなと顔を合わせて雑談できるのが楽しみ」とラジオ体操の魅力を話す。

ストレッチ、ウォーキングも

泉区役所の北側に位置する将監地区は、昭和40年代に宅地開発された団地



ラジオ体操前の、楽しい井戸端会議



ラジオ体操を楽しむ皆さん

将監ふれあい体操会

桜井 享修さん (前列中央)

「ラジオ体操の効果はもちろん、
人とのふれあいで絆が生まれるソフト面の効果が大きい」

だ。将監1丁目から13丁目まであり、1万5千人弱が暮らす。当時の子育て世代はシニア世代となり、高齢化率は32.5%だ(2016年4月1日時点)。

会社を営んでいた桜井さんは、各職場や営業所で毎日のラジオ体操を習慣としていた。第一線から退いたあと、家にずっといるのが性に合わず、知人の大森康市さん(79歳)と2人で朝に歩くようになった。ウォーキングのついでに、ふれあい公園でラジオ体操を行うようになったのは自然の流れだった。

ラジオ体操が終わると、参加者の半数がそのまま自主的に残り、スクワットなどのストレッチ体操を10分ほど行う。それだけでなくも結構な運動量だが、そこからさらに自発的に10人ほどが集まり、毎日3キロのウォーキングを楽しむという。コースは3種類あり、団地の歩道のところどころに目安の距離が書かれてある。コースはその日の気分で決めるが、自宅のそばまで歩い



有志で3kmのウォーキングも楽しむ

て離脱していく人や、将監名物の揚げたてコロケを買うために近くまで一緒に歩く人など、参加の仕方が自由で開放的だ。ゴールの公園に戻るまでに、少しずつ人が減っていく。毎日メンバーが入れ替わりますが、ラジオ体操後にストレッチをしてゴールまで歩く人は6、7人ほどおり、「皆勤賞」の男性が3人いるという。

この日一緒に歩いていたなかに、東日本大震災で宮城県沿岸部の家と仕事を失い、将監団地に引越してきた人がいた。「見知らぬ土地で心細かったけれど、ラジオ体操を見かけて、『私も参加できま

すか』と思い切って声をかけてから、体操を始めて。知り合いが増えてうれしい」と話してくれた。ほかの参加者からも、「ここにはいろんな人が来る」「家を出て、朝から何気ない会話を楽しめるのがいい」「いつも来てくれる人が来ないと、心配になる」という声が聞かれた。参加する人たちが、近隣の人とのふれあいを楽しまれている様子が印象的だ。

人と会って

一日を始める効果

現在、桜井さんは地元65歳以上の人が加入する「将監中央将寿会」の会長や、月2回市民センターで健康体操を行う「ひまわりクラブ」の代表を務める。誰もが気軽にできるラジオ体操は、健康増進の効果はもちろんのこと、人と人とのふれあいで自然と絆が生まれるソフト面の効果が大きいと桜井さんは話す。

参加者が増えるなか、雨などで中止する日が周知できるように、ラジ

オ体操を行う朝は公園内に旗を立てることにし、NPO法人全国ラジオ体操連盟から提供された青い旗を活用。同連盟からはTシャツも提供され、必要に応じて世話人的メンバーが着用する。また、それまで個人のラジオを使用していたが、地区社協から予算を得て、専用のラジオを購入することもできた。当初は男性の参加が多かったが、いまは女性の参加も増え、にぎやかな雰囲気だ。

ここから派生し、将監団地内でラジオ体操があちこちで行われるようになったいまも、元祖ふれあい公園の参加者数が最も多い。桜井さんの「誰でも歓迎」という柔らかい物腰が、仲間を増やしているように感じた。「家族を介護中だったり、高齢者のふたり暮らしの世帯もいるなか、地域の人と交わることが暮らしを心豊かにする」と話す桜井さん。「人生を楽しみながら過ごせるよう、ラジオ体操で元気を継続していきたい」。



雨天でも、集会所でめいっぱい身体を曲げ伸ばし

体操から始まる地区周辺の交流

くろいしぎ
◎黒石崎老人会（宮城県多賀城市）

ポイント

●地域住民による体操、合唱、お茶飲みで、一石三鳥のサロン

宮城県多賀城市の黒石崎地区では、老人会がラジオ体操を行っている。いつも朝10時から、集会所前の広場で30人ほどのお年寄りが集まる。雨の日も、集会所のなかで体操をする。室内での体操も、隣の人とぶつからない程度に腕をよく伸ばしている。「イチ、ニ、サン、シ、ゴ、ロク、シチ、ハチ！」とお腹から声を出したりもする。

ラジオ体操の第1と第2を済ませ、てきぱきとパイプ椅子を並べる。それぞれが着席すると、次は歌の合唱が始まった。男性メンバー1人が指揮者となり、大正琴のサークルに所属している女性メンバーの2人が、琴を奏でる。ほかのメンバーはそれに合わせて、歌詞カードを見ながら歌う。「里の歌」「青い山脈」といった懐かしい、馴染みのある歌に心を込めて、歌声を合わせる。歌が終われば、次はお茶飲み。再び皆で二斉に椅子を移動し、室内をめいっぱい使って長机も並べる。老人会の役員など、率先して動く女性メンバーが給湯室と行き来し、テーブルにはコーヒール、お茶、お菓子が配られる。

30分ほどおしゃべりの時間となる。お茶飲みときの話題は、家族のことや健康のこと、そのほか、さまざまな世間話。体操よりもお茶飲みの時間が好きだという参加者もいるくらい楽しまれている。

高齢でも元気に活動

同老人会には59人が所属し、平均年齢は82歳。入会条件は、「60歳以上であること」と「黒石崎地区かその周辺に暮らしていること」の2つ地区外に住む会員もいる。会全体の活動には、会員からの年会費に加え、町内会からの助成金が充てられるが、ラジオ体操の集まりは老人会の経費に頼らない。参加者から毎月100円を貯金箱に入れてもらうことで、体操後の楽しみになるお茶代・お菓子代を賄っている。同老人会でラジオ体操に参加している最高齢は、男性が92歳、女性が91歳。高齢のメンバーが多いが、体操をしている姿や座っている姿を見ても、皆しゃきつとしている。2015年4月に会長に就任した吉田元明さん（82

（歳）は、「何か地域の特徴となるようなものをつくりたい」という思いから、ラジオ体操を提案。ほかの会員からの共感・同意を得て、集まるようになった。「無理には参加しなくてもいいよ」と始めたが、体操に歌、お茶飲みと、1時間ほどの集まりのなかで楽しいこと、健康に良いことが詰まっている。

住民同士がほぐれた関係に

黒石崎地区の辺りは、かつて防衛省からあつせんされた土地で、住民の多くは、元自衛隊員やその家族。自身や旦那さんなどが自衛隊に勤めていたことから、住民同士の一体感もあるという。「隊員時代の階級とかはバラバラだけど、そんなことにこだわらず、何でも言い合うことができる良い関係」と吉田さん。若い頃に身体を鍛えていても、地域で元気に暮らし続けるため、住民同士のつながりがたいせつにされている。

参加者のなかには、東日本大震災により津波の被害を受け、隣の町から同地区内に引っ越してきた人もい

る。ラジオ体操に参加し、ほかのメンバーと仲良くおしゃべりを楽しんでいて、「初めは知らない人ばかりだったけど、いまでは知り合いができてうれしい」と話す。

参加者自身、集まることが見守りにつながっていることを自覚していて、欠席した人のことは気にかけるようになっていく。また、休む日があれば、前もってほかのメンバーに伝えておくようにしている。

無理なく活動を続けるコツは、当番制にしないことだという。メンバー間で順番に作業を回すよりも、できる人ができることをしていくほうがスムーズに継続できるといふ。メンバー同士、お茶の準備や片付けをしてくれる人に、「ありがとう」「いつも悪いねえ」と感謝の心は忘れない。

誰が参加したか、毎回名簿をもとに確認し、人数も記録している。昨年度の参加人数と比較して、今年度の出だしは好調のようだ。

住民同士の支え合いの輪が広がり、一人ひとりの健康と住みやすい地域づくりが促進されている。清

島根大学 法文学部 福祉社会教室 准教授

加川 充浩 (かがわ・みつひろ) さん



兵庫県神戸市生まれ。2004年から島根大学法文学部福祉社会教室専任講師。2007年から現職。専門は地域福祉論。島根県老人クラブ連合会評議員、松江市地域福祉計画・地域福祉活動計画策定委員長などを務め、実際の地域福祉活動にも関わっている。

専門家に聞く地域づくりのヒント

住民主体の優良実践を ソーシャルワーカーがさらに どう活かすかもたいせつです

3つの事例とも、「ラジオ体操」を活動の中心に据え、地域住民のつながりを構築していました。住民が主体となった地域活動・地域福祉活動であると評価できると思います。

以下では、まず3事例に共通する特徴を述べます。次に各事例が持つ固有の特徴を見ながらも、全国の他地域にとって参考になる点について言及します。

3つの事例に共通する特徴として、第一は、多くの住民にとって参加しやすい活動であるということです。ラジオ体操は昭和初期に始まり、国民の多くが親しんできた歴史があります。そのため、地域の活動として、参加者を得やすいと思われれます。長年、地域福祉活動を行っている地区は、多様な活動メニューをもっています（体操教室、見守り活動、生鮮食品の朝市など）。しかし、これから始めようとする地区で大事なのは、取り組みやすい、また参加しやすい活動を設定することです。ラジオ体操はそのひとつと言えます。

第二は、男性も参加しやすいということです。3事例とも男性の参加者が少なくありませんでした。たとえば、黒石崎老人会ではお茶飲み会も行っていました。これがお茶飲み会だけだと、男性にとっては少しハードルが高いかもしれませんが、「健康」を目的とした活動や、屋外で身体を動かす活動は、男性の参加を促進するように思います。

第三は、地域包括ケアシステムの一翼を担う可能性があるということです。もちろん、住民の皆さんがシステム構築を活動の主目的にする必要はありません。一方、行政やソーシャルワーカーが、こうした住民主体の活動とうまく連携しながら、政策・支援を展開することが今後求められるのではないのでしょうか。

最後に、3つの活動それぞれがもつ固有の特徴について述べたいと思います。黒石崎地区の活動は、老人会が担い手です。老人会（老人クラブ）の活動目標は、「健康・友愛・奉仕」と言われます。特に、近年では地域課題解決に取り組む「奉仕」の面が目立っています。黒石崎地区では、ラジオ体操をおとした見守り活動も行っており、これが地域課題解決の一環にもなっています。下茨田南災害公営住宅での活動は、被災者の孤立防止となっている点が優れていると思います。これは、阪神・淡路大震災後以降、現在でも課題です（兵庫県はいまでも毎年、復興住宅での孤独死数を把握しています）。被災者にとって、新たな住環境のなかで人間関係をつくる場があることは、たいせつなことです。将監地区は、昭和40年代に開発された団地です。当時、20歳代、30歳代だった入居者が、会社を退職して地域で過ごす時間が増えていると思います。そうした団地に住む人々が全国に増えるなか、お手本となる活動だと感じました。

仮設住宅団地や 復興住宅での つながりづくり

一般社団法人石巻じちれん
(宮城県石巻市)



今年1月に開催した「カラオケ温泉日帰りバスツアー」は大盛り上がり



一般社団法人石巻じちれんが活動する宮城県石巻市は、東日本大震災により、134か所の応急仮設住宅団地及び5808戸の民間賃貸住宅(みなし仮設)で3万2千人余りが暮らした(2012年6月ピーク時点)。16年5月現在は、仮設住宅団地に3746戸が住み、入居率は52.6%。そのなかで、前身となる「石巻仮設住宅自治連合推進会」は、「孤独死をなくそう」を合言葉に、市や市社協、支援団体のほか、市立病院



毎朝のラジオ体操

や警察署などとも連携を図り、39仮設団地の加盟を得て、コミュニティづくりに取り組んできた(今年1月に法人化)。仮設住宅団地同士の交流を図るカラオケ歌合戦やスポーツ大会、10世帯ほどの小規模仮設住宅団地同士が交流するバス旅行の開催のほか、仮設住宅団地を越えた明るい話題づくりや元気を引き出すために、市内に住む特技をもつ人などを発掘して、「巻の人間国宝」として認定するユニークな取り組みを行い、隔月発行の情報紙で紹介している。

また、仮設住宅団地同士の交流を促進するために、仮設住宅団地の役員として頑張ってきた人を、「連絡スタッフ」として14年7月より雇用していることも大きな特徴だ。現在4人の連絡スタッフ、住民の目線で生活課題の抽出やつながりづくりを手伝い、大きな存在となっている。

さらに、市が4500戸の復興公営住宅を建設する計画を受け、14年4月にじちれんが行ったアンケート調査では、「復興公営住宅に移れた当初はうれしかったが、今は寂しい」という意見が表出。復興公営住宅への転居だけで復興は完了しないことを痛感し、そのあとも新しい住民同士のコミュニティづくりを手伝おうと、復興公営住宅での朝のラジオ体操や、万が一倒れた場合の緊



住所 石巻 太郎 ①女	性別 女	氏名 石巻 花子	続柄 妻
本 人	石巻市蛇田新立野0-0 0225-00-0000 ※年月日	石巻 次郎	長男
(大) 21年 月 日	石巻 一郎	次男	
(記入平成27年1月1日)	渡波	070-0000-0000	

緊急の連絡先を書き込む「つながりカード」を奨励

急連絡先を書き込み携帯する「つながりカード」の普及に努めている。

現在、じちれんの事務所がある市営新立野復興住宅は、戸建て型と集合住宅型を合わせて1265戸が4期に渡り整備される新興団地だ。抽選入居のため出身地はバラバラだ。そこで、平日の毎朝8時半から、第1集会所の前で20人ほどが集まり、ラジオ体操を通じて顔を合わせた交流を深めている。じちれんの会長で、この団地の住民でもある増田敬さんは、「昨秋に芋煮会を開いた際には、約150人の参加があり、にぎわった。戸建てと集合住宅の入居者が交わる機会を増やして、部屋に閉じこもりがちな人も参加できるような働きかけを考えていきたい」と話す。

DATA

一般社団法人
石巻じちれん

〒986-0861
宮城県石巻市蛇田字新立野76
市営新立野第1復興住宅集会所
TEL 0225-22-0223
URL <http://jjichiren.info/>



仮設住宅から転居先までを支援 LSA配置で新たなまちづくりをあと押し

宮城県気仙沼市



宮城県気仙沼市は人口6万6300人、高齢化率35・2%（2016年3月末時点）。リアス式海岸による港町として知られる。

東日本大震災での人的被害は1359人（うち行方不明者220人）、被災した住宅は15815棟（14年3月末時点）。推計で9500世帯が被災し、市は応急仮設住宅を93か所に3504戸用意した。平地が少なかったため、多くの仮設住宅は学校の校庭に建てられ、また隣接する岩手県一関市にも建設された。今年3月末現在も、4653人が仮設住宅で避難生活を送る。

市は防災集団移転事業をすすめるとともに、災害公営住宅を市街地の13地区に1329戸、郊外の15地区に804戸を整備する。今年度中に全体の約9割が完成する見込みだ。仮

設住宅を去る人が増えることから、市では学校の校庭を早めに児童生徒へ開放するため、校庭に建てた仮設住宅などを中心に仮設住宅団地の集約作業に移る。今年度は10月以降に9団地の撤去をすすめる計画だ。

市ではソフト面において、仮設住宅の入居者のみならず、新たな再建先での孤立防止やこころのケアの充実を図るべく、被災者支援事業に取り組む。

仮設住宅等での支援

震災後、市内3か所及び一関市の計4か所に「サポートセンター」が設置され、応急仮設住宅の入居者を対象に、総合相談や交流活動のサポートにあたりてきた。市から委託を受けた、地元介護事業者や社会福祉協議会など4

法人が運営。総従事者は18人で、昨年度は、訪問活動・相談・イベントの協力などで4か所の総計1万7216件活動した。そのうち、訪問活動は延べ1万4864件で、心のケアやアルコール依存症、認知症などにより継続支援の必要な人への訪問が246件あった。現在も、生活再建の見通しが立っていない世帯や、障害や病気などのために継続的に支援が必要な世帯を訪問して歩いている。

また、仮設住宅の自治活動を応援するため、市地域づくり推進課内に地域支援員を10人配置。応急仮設住宅89団地および雇用促進住宅2か所における自治組織の会長や役員を2人1チームで訪問し、相談に応じている。仮設住宅やみなし仮設住宅入居者を対象とする広報紙を隔月で発行するほ

か、毎月末に仮設住宅の空室状況調査も実施している。

一方、民間賃貸住宅（みなし仮設）や在宅を含む被災した世帯を全戸訪問し、見守りや相談、地域交流を図っているのが、「絆」再生事業を市から受託した気仙沼市社会福祉協議会だ。

昨年度は、復興支援コーディネーター12人と生活支援相談員25人の計37人体制で、訪問1万6495件、相談延べ143件、交流事業延べ370件を実施。相談内容は、生活再建や健康に関するものがほとんどを占める。

住宅再建先での支援

災害公営住宅への入居が始まった昨年度から、市で新たに配置したのが生活援助員（LSA）だ。集合住宅型の災害公営住宅内に設置された「高齢者相

談室」など市内7か所に、計25人を配置。市から委託を受けた、地元の5つの法人が運営する。災害公営住宅の入居者だけでなく、その周辺地域や仮設住宅を含めて巡回訪問し、安否確認や声かけ、相談に応じる。最も多い相談内容は健康問題で、次いで住宅問題、交流活動と続く。これまで戸建てで暮らした経



被災者支援業務担当者会議

験しがなく、初めて集合住宅で生活を始める高齢者にとつては、慣れない住宅設備の使い方をLSAに相談したり、高齢者相談室に立ち寄ってLSAと何気ない会話を楽しむことが、新生活になじむ一歩につながっている。

担当する市保健福祉部高齢介護課課長の菅原宣昌さんは、「将来的に、LSAがいなくても近所とコミュニケーションを図れる関係の構築が目標。自立再建が本格化するなか、各支援員の役割が一層大事になる」と連携の重要性を説く。同課では、サポートセンターや絆再生事業、

LSA事業と市の関係各課が参加する「被災者支援業務担当者会議」を隔月で開催し、情報交換に努めている。

災害公営住宅と 周辺地域をつなぐ

災害公営住宅等に住む新しい住民が、周辺地域にスムーズに溶け込むには、地域全体で支え合う土壌づくりが求められる。市社協では、14年度から宮城県社協とタイアップし、「災害公営住宅を含む地域コミュニケーション構築支援事業」を南郷地区ですすめてきた。市内で第1号の災害公営住宅となった南郷住宅は、集合住宅型の3棟からなり、震災で統合・閉校となった市立南気仙沼小学校跡地に建設。15年1月に第1期の75戸が入居し、同年3月に第2期90戸の入居が始まった。14年6月、市社協は南郷地区の自治会や地区社協に対して説明会を開き、事業への理解を得た。その際、地元住民は、災害公営住宅の具体的な様子が見えないために漠然と

した不安を抱えていることがわかった。そこで8月、南郷1区自治会の夏祭りに入居予定者を招いて交流し、9月には地域住民による勉強会を開催。一方、市とは、関係各課が参加する災害公営住宅入居者支援会議に市社協が3度出席し、今後の方針を共有したことが、南郷地区での5回に及ぶ住民交流会の実施につながった。交流会は、入居者のための事前説明会に合わせ、市との共催で開催。入居予定者に地元の自治会長から歓迎のメッセージが寄せられ、入居者同士や地域住民との顔合わせの場となった。また、仮設住宅時から顔なじみの相談員が、自治会長や南郷住宅に配置となるLSAに入居予定者を引き合わせ、途切れがちな転居期の支援をつなげる役割を果たした。入居後の15年6月には、地元の有志による実行委員会形式で入居者歓迎交流会が開かれ、南郷住宅の自治会（南郷3区）も発足。今夏は、南郷住宅を含めた南郷1区〜3区での合同夏祭りが企画されている。



南郷地区公営住宅入居者説明会・交流会

この南郷地区の実践から、市の説明会後に交流会をセツトし、地元の住民が参加する形が他地区にも定着。市社協では今年度、災害公営住宅の入居が始まる

気仙沼駅前地区でも、同様のモデル事業を行う。「事業3年目の集大成として取り組みたい」と市社協在宅福祉サービス課課長の芦立吉人さんと同地域福祉課課長の鈴木美紀さんは意気込む。

地域包括ケアで

震災からの復興を推し進める市では、新たなま

ちが形成される地域を含め、自立した生活を送ることのできる地域づくりを目指し、「気仙沼市地域包括ケア推進協議会」を14年12月に設立している。16年3月には、今後の方向性を示す「気仙沼市地域包括ケアシステム構築に向けたアクションプラン」を策定。「交流サロン」や「健康介護まちかど相談窓口」を推進拠点として支え合い活動の活性化を図るなど、69プランで構成される。

それに先行して、市は15年4月より、交流サロンに対する助成事業を開始。これにより、自治会や有志による多様な交流サロンが生まれ、16年6月時点で市内の交流サロンは28か所になった。市高齡介護課課長の菅原さんは、「交流サロンや地域のつどい場が、社会参加の場となり、生活の再建をもあと押しする。これからの大きな目玉」と話す。震災から5年、着実に暮らしの復興を下支えしている。

DATA

あんでるせん
店長 小笠原辰雄

〒026-0301
岩手県釜石市鶴住居町3-7-2
鶴! はまなす商店街B-103
TEL 0193-28-4466
E-mail
andersen.kamaishi@gmail.com
URL
http://toughoku.me/andersen/

29回目

市民リレー

東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

今回は...

温みあるパンと笑顔 届けてつながりづくり

◎あんでるせん(岩手県釜石市) ライター: 元持幸子



雨の日も、お客でにぎわう移動販売



焼きたてパンと地元の食材でいっぱいの荷台



笑顔でお客を迎える小笠原店長

岩手県釜石市の老舗の手づくりパン屋さんである「あんでるせん」は、同市内を移動販売車で回っている。宣伝文句は、「手づくりパンの移動販売、おなじみの曲『タン・タン・タン』で販売車の到着をお知らせします」。店長の小笠原辰雄さんとご家族で、37年間移動販売と店舗販売を手掛けている。バイエル(ピアノの練習曲)の曲が、看板メロディー。「いままでは、この曲がラジオ体操の曲のように浸透していて、曲が流れるとお客さんが販売車の周りに集まってくるんですよ」と、小笠原さんは、笑顔でお客を迎えている。

東日本大震災により小笠原さんは店舗も移動販売車も失った。震災後の半年余りで、再出発を決意した。バラバラになった地域の人たちとのつながりをたいせつにしたいという思いもあり、パンの移動販売も再開した。移動販売は、午前10時過ぎに鶴住居地区にある仮設店舗を出発し、釜石市内の仮設住宅を中心に回っていく。訪問する場所によって曜日と時間は決まっており、各地で常連客が移動販売車の到着を待っている。

創業当初から行っている移動販売は、お客である地域の

人たちのつながりを再構築することにも一役買っている。「食べものを売っているから、日常の変化がより見えてくる」と小笠原さん。震災から5年目になると、お客も高齢化が進んでいる。ひとり暮らしや公営住宅等への転居など、買いたいものへ行くことが難しい人たちの日常の暮らしの変化を肌で感じているという。パンの移動販売車には、焼きたてのパンのほかに、同じ仮設商店街の惣菜屋さんの弁当や団子、地元の野菜や花なども荷台いっぱい積み込まれている。これらの品ぞろえは、買いたいものに行くことが困難なお客からのリクエストがあったからだ。

小笠原さんは、「食パン1つでも買いに外に出てきてくれることが、とてもうれしい。今日も元気にしているなあと、声をかけることができたときはほっとします」と、互いに声を掛け合う機会をたいせつにしている。そのため、移動販売車の周りには住民たちのにぎやかな社交場ともなっている。

「また来るから、元気だな!」と声をかけながら、あんでるせんはこれからも焼きたてパンと元気を販売車に乗せ市内を回っていく。



支え合い
S-1
グランプリ
第3回いがす大賞

東日本大震災・私の地域の元気興し

I.A

被災地の優れた住民支え合い活動を掘り起し、称え、広く発信するS-1グランプリ。2016年2月20日(土)に仙台市内で開催された第3回の応募者、入賞者のアイデアと実践を、連載形式で紹介しします。



小物づくりの活動をファッションショーのように紹介した、岩手県大槌町の「おおつちおばちゃんくらぶ」が、S-1グランプリでもおもしろさを称える「おもせ賞」を受賞した。

メンバーは、東日本大震災後に仮設住宅などで暮らすようになったおばちゃんたち約20人で、平均年齢は70歳代後半。

アンテナ・デザイン・ユニットや、風の布パピヨン主宰斎藤洋さんらと協力し、大槌町の特産品のひとつ、「鮭」を模したマスコットを「手」づくりする「Shake Hand」というプロジェクトに、2012年度から取り組んでいる。「シヤケ」と「shake」の言

葉あそびでつけられた英語の企画名は、「手をつなぐ」という意味をもつ。

仮設住宅やその集会所などで、鮭のシルエットをかたどった布地を縫い合わせ、なかに綿を入れることで、立体的で柔らかな、手のひらサイズの鮭ができる。「鮭ヌード」と呼ばれるその無地の鮭たちは、いろいろんな人の手に渡り、受け取った人が色を塗ったり、布やビーズなどを取り付けたりして着飾り、鮭の加飾として仕上がる。大槌から放たれる鮭ヌードたちは、日本全国、さらにはアメリカやヨーロッパなど、海外にまで旅をする。

本物の鮭が、川で生まれ、ひとたび海に出てから自分の生まれた川に帰ってくるように、それぞれの鮭ヌードが世界に1つの鮭に成長して、故郷のおばちゃんくらぶのもとへ送り届けられる。もともと住んでいた地域に戻って暮らそうというメンバーの思いが、鮭の生き方と重なっている。

雛祭りなどの季節にちなんだもの、親子設定のセッ

トのものなど、工夫に富んだ鮭が自由に生み出されていて、リピーターも多い。年間500〜1000匹生まれる鮭ヌードを受け渡しの際に買い取ってもらうほか、装飾された完成体を買売することで、メンバーのおばちゃんたちの収入へとつながる。一連の流れのなかで、鮭1匹1匹に何人もの人が手を取り合うように関わり合っている。

神戸市や京都市などを会場に、集まった手づくり鮭たちの展示会も開催していて、17年3月には大槌町で行う。代表の川原畑洋子（かわらはた）さんは、「地元での開催を成功させたい」と意気込んでいる。**清**



人それぞれのデザインでつくる、鮭の形のマスコット

● Profile

ご近所福祉クリエイター 酒井保 (さかい・たもつ)

1961年 広島生まれ。知的障がい者施設、市町社会福祉協議会、認知症グループホーム・小規模多機能型施設の施設長職を経て、2014年8月に「ご近所福祉クリエイション」を創設(主宰)。ご近所福祉クリエイターという肩書きのもと、広島と仙台を拠点として、全国各地を講演行脚中。2016年度より、宮城県塩釜市をはじめ岩手県・宮城県・福島県で地域支え合い活動の立ち上げ等にかかる諸事業に参画。イラストレーター。主な著書に、『見守り活動』から『見守られ活動』へ』(CLC発行)、『生活支援コーディネーターと協議体』(共同執筆、CLC発行)。

「支え合い」をつくる時代

ご近所福祉クリエイション主宰 酒井保

向こう三軒両隣とプライバシー

人前でしゃべることを生業としている僕に、最近多く寄せられるオーダーは、「支え合いをテーマに講演を」というもの。そこに求められるキーワードは、向こう三軒両隣[※]である。「地域づくりに必要なものは、昔は当たり前にあつた向こう三軒両隣[※]というご近所同士の関係性。その関係性が希薄となった今こそ、向こう三軒両隣[※]の再生を！」というのがその趣らしい。

僕が敬愛してやまない江戸文化研究者でエッセイストの田中優子さんは、著書『大江戸ボランティア事情』(講談社発行)のなかで、「心から自然に、人間および人間以外の生物や環境とともに生き、本来われわれに備わっているバランス感覚によって、助けたいときに助け、助けられたいときに助けてもらえる社会である。助けを必要としている自分の弱さをあずけられる社会である」と、向こう三軒両隣[※]を説いている。そしてそれは、江戸時代の暮らしのなかにはつきりと見ることができ、昭和40年代まで存在していた価値観だったと評価している。講演の最中、聞き手の皆さんに「向こう三軒両隣[※]は、なぜ消滅したのでしょうか？」とマイクを向けると、おおよそ「プライバシー」という答えが返ってくる。

そもそも、助け助けられるためには、お互いに相手の様子をわかり合っているということが大事な条件である。しかし、いまの時代はプライバシーというものが、その条件を阻害しているのだという。

自分の弱さをあずけられる社会

「自分の弱さをあずけられる社会」と評価される昔の暮らしには、プライバシーというものはなく、「見えていても、聞こえていてもお互いに不都合となることは、知らなかったことにしようという、見えていない、聞こえていないふりをするという文化[※]があつた」と田中優子さんは述べている。しかし、いまはどうだろうか？ プライバシー重視の文化。見ちゃいけない、聞いちゃいけない、気にしちゃいけない文化[※]ということだろうか？

お互いの暮らしの様子が多々漏れだつた時代には、余計なお世話[※]も含めて、日常のなかに支え合い[※]があつた。それは、見たくなくとも見える、聞きたくなくても聞こえるご近所同士の暮らしの様子に「気になる」という感情を揺さぶる情報が確認されたときにじわじわと動き始める。「気になる」という感情は、「放っておけない！」という行動へ移行するための起爆剤となる。

お互いに干渉し合うことがタブーとなつたいまの時代、「気になる」

という感情は生まれにくくなった。だから、わざわざ「ふれあいいきいきサロン」や「コミュニティ・カフェ」といった集いの場を意図的に設けて、「気になる」という感情を揺さぶり合わなければ、支え合い[※]が醸成されにくくなったということか。

ふれあいいきいきサロンの苦悩

先日、ある町の支え合い[※]をテーマにした講演会へ登壇した際、聞き手のお一人からこんな質問をいただいた。

「ふれあいいきいきサロンのボランティアをしています。ゲームを楽しんだり、談笑したり、参加した皆さんに喜んでいただいております。しかし、地域のなかには、いくらお誘いしても参加されない人がいます。どのようにすれば、その人たちがサロンに参加してくれるようになるのか、良い方法があつたらご教示ください」

じつはこの質問、ある意味定番で、講演後の質疑応答の時間にこの質問が飛び出すと、聞き手の皆さんは、お互いに顔を見合せて頷き始める。どうやら、サロンに参加しない人の存在[※]が皆さん気になるようである。この質問に、僕はいつも「その人たち、サロンに参加されなくてもいいと思いますよ」とお答えしている。無責任な発言に聞こえるかもしれないが、真意は以下のとおり……

「なぜって、皆さんがサロンを始めたことよって、サロンに誘いかけても参加しないAさんやBさん、Cさんに皆さん自身も関心をもつようになったわけですよ？ サロンを始めていなかったら、その人たちのことを気にしてしましたか？ いなかったでしょ？ その人たちのことを放っておけない！」と思っているわけですよ！ これって、すごいことじゃないですか！」

つまり、サロンによつて「気になる」が生まれたということ。サロンが向こう三軒両隣[※]を再生させていると評価することができると、そう評価するべきである。しかし、サロンを推進している人たちは、どうもサロンに参加している人たちのことが気になるらしい。サロンに参加している人数がサロンの評価になつていることもある。僕は、こう思う。「サロンに参加できる人よって、本来、放っておいても大丈夫な人たちでは？ 気にするべきは、サロンを始めたことよつて発見されたサロンに参加しない人のこと！ その人たちのことが気になり始めたということが、本来、評価されるべき！ サロンに参加しようがしまいが、誘い続けて、何かあつたときには、大丈夫ですか？」と気にかけてあげる。気にしてあげる。それでいいんじゃないかなあ」と。

支え合い[※]をつくる時代……これはこれで、すごい！

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

熊本地震、被災地の様子

去る6月15日から3日間、CLCのコーディネーターで、熊本県に出向いてきました。当事務所の真壁さおりコーディネーターと、サポ弁の弁護士が同行してくれました。

熊本県でも、熊本地震による被災者の生活支援において、サポートセンター的な仕組みを検討中です。そこで、宮城方式におけるサポートセンター設置から運営の経緯、課題などをお伝えすることが役割でした。2泊3日の短い日程でしたが、南阿蘇村、西原村、益城町を視察し、県庁・市町村担当者とのサポセンを中心とする被災者支援の勉強会、サポセン受託予定の社協や地域包括支援センター等対象の研修会に行ってきました。兵庫県宝塚市社協の佐藤寿一常務理事ならびに淡路市社協の風保憲事務局次長との協働作業でした。

勉強会、研修会を通じて、熊本県庁は市町村との距離感が近いと感じました。熊本でのサポートセンターは、「地域支え合いセンター」という名称になるようです。サポセン機能を災害公営住宅への転居期も見据えた長期スパンでの被災者支援と位置づけ、地域づくりも意識した熊本県の仕掛けは、宮城県での災害公営住宅転居期における支援体制の遅れを実感する者としてうなりこむものでした。先を見据えた仕掛けが良い仕組みとなるような期待感を抱かせます。

熊本と宮城では、被災の状況に違いはありますが、被災地の住民力を活かす復興に向けた取り組みの必要性は共有してきたつもりです。また、同行したサポ弁の宇都弁護士は、熊本弁護士会や熊本県、熊本市とのつなぎ役として尽力。弁護士の持つリーガル・アドボカシー（弁護士や当事者などが協働で活動すること）の動きを、被災者支援のなかで発揮するための前さばきを果たしてくれました。今回弁護士に同行を依頼したのは、まさに宇都弁護士の動きを期待してのこと。熊本の皆さんにサポ弁の動きを理解していただけたと思います。

ひとりごと

サポーターのあなたへ



宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上章

住民主体の活動を うまく運営するには～？

前号では、住民の思いや力を丁寧に引き出し、活動につなげていくことを書きました。

その後、たとえば“〇〇カフェ”を立ち上げて運営していくことになったとします。立ち上げの準備段階では、カフェのねらい目的、どんなカフェにしたいか、開催頻度や必要な経費、参加費やPRはどうするかなどを十分に話し合っ決めていきます。

カフェを定期開催していく場合は、世話人を決める必要があります。準備段階で参加してくださった人のなかから、思いの一番強い人や年齢、動ける環境、人柄なども踏まえて、皆さんの合意のなかで責任者（リーダー役）を決めます。そして、ほかの人もそれぞれの事情や持ち味、希望を尊重して、大まかな役割分担をしていきます。

会や活動を継続的に運営していくうえで、のたいせつなポイントの一つ目は、一部のみに責任や負担が偏らないように、みんなで分担して行うことです。一部のみに負担がかり過ぎると、続かなくなります。また、ほかの世話人が他人任せになりかねません。

二つ目は、お世話をする人たち自身が楽しくすることです。これは、参加者を放っておいて世話人だけが楽しく、ということではありません。参加者に楽しんでいただくことが一番たいせつですが、『世話人も活動が楽しい』と思えるものにしていく、ということです。そのための大前提は、世話人同士で批判したり責めたり、陰口を言ったりしないということです。地域活動は、住民の自主的なボランティア活動です。世話人も、ときには参加できなかつたり、十分な役割を果たせないこともあります。そんなとき、つい愚痴や批判が出てきますが、そんなときこそ「お互いさま」の精神で寛容に、できる人でカバーし合う、ということがたいせつだと思います。

自主的な活動で、ほかの人から批判されたり、責められたりすると、された側の人は、二度と活動には参加したくなくなります。「できるときに、できる人がする」というのが地域での自主活動の原則です。リーダー役や支援者には、その点の配慮をしていただきたいと思います。逆に、ぜひお勧めしたいことは、事前の準備会とか、カフェ終了後の“振り返り”を行う際に、美味しいお菓子やコーヒーを食しながら、みんなで楽しくおしゃべりすることです。活動者も楽しく、幸せに！

平成28年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

分野別研修Ⅱ

障がいのある人と家族への支援の形

【石巻会場①】8月18日（木）石巻市河北総合センター ビッグバン

【石巻会場②】8月19日（金）石巻市河北総合センター ビッグバン

講師：大友 愛美（特定非営利活動法人 ノーマライゼーションサポートセンター こころりんく東川 副理事長）



左から、阿部福美さん、阿部若子さん



暮らしを支える支援員20

住民の拠り所 地域のつながりの要に

南三陸町戸倉地区災害公営住宅
高齢者相談室（宮城県南三陸町）



南三陸町では町社会福祉協議会が町から業務委託を受け、世帯数が60世帯を超える災害公営住宅に、「災害公営住宅生活援助員」を置いている。南三陸町戸倉地区災害公営住宅では、入居が始まった今年3月から、同住宅の集会所内に設けられた高齢者相談室に2人の援助員が駐在を開始した。

同住宅は、集合住宅3棟と戸建ての住宅を合わせて80世帯が住む。入居者の4割が高齢者のため、仮設住宅から設備の整った公営住宅に引っ越した当初は、設備の使い方がわからないという声が多かった。問い合わせがあるたびにそれぞれの居室を援助員が訪ね、丁寧に使い方を教えた。そうするうち、住民も徐々に新しい住宅に慣れ、「いいところに引っ越せた」という声も聞こえるようになったという。また、種々の手続きや、町役場への問い合わせなどの手助けを求められることも多い。独居の世帯も多いため、わからないことや不安なことを誰でも気軽に相談できる援助員の存在は、住民の大きな安心感につながっている。

相談だけでなく、少しおしゃべりがしたいから、と集会所を訪ねる住民もいる。集会所では月曜日から土曜日の朝9時30分から体操を行い、その後1時間ほどお茶の時間を設けているほか、それ以外の時間にも自由に集会所を利用することができる。「交わすのは他愛もない話ばかりだけど、それがたいせつなのだと思う。特に独居の方は、1日誰とも話さないということ

もある。誰かと話したいと思った時は、気軽にここに来てもらえたら」と援助員の阿部若子さんは言う。

一方、住民の見守りを行うなかで、ほとんど会うことができない人や認知症の疑いのある人など、気にかかる住民も少なからずいるという。住民の負担にならない範囲で、どこまで踏み込んでいいのか。前例のない活動に、未だ手探りの部分も多い。

入居から4か月が経ち、「イベントを開催したい」「サークルをつくりたい」という要望が増えるにしたがって、自治会をつくりたいという相談が多く寄せられるようになった。今後、住民とともに町と調整を行い、設立に向けて働きかけていく予定だ。

同住宅の敷地には、今後50戸の戸建て住宅が建つことになっており、新しい住宅への入居者も決まりは始めている。また、近隣の小学校や保育園と連携した活動が始まるなど、つながりは公営住宅のなかから外へ広がりつつある。援助員の阿部福美さんは、「新しい住民や小学校、保育園なども含めて、この地区全体で新しい地域づくりを行っていききたい」と意気込む。つながりづくりの要として、地域全体に大きな役割を果たす災害公営住宅生活援助員の活躍に期待したい。吉

DATA 南三陸町戸倉地区災害公営住宅 高齢者相談室
〒986-0781 宮城県南三陸町戸倉字津野50-17
TEL/FAX 0226-25-8856

購読者を募集しています！

【月刊 地域支え合い情報】を年間購読しませんか？

購読会員 年3,696円（年12回、送料込み）

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

◎お振込先 ●ゆうちょ銀行振替口座
口座番号：02260-9-46303
加入者名：全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、

①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み を記入してください。

お知らせ ☆次号予告 特集「移動販売から生まれる支え合い」

平成28年度 宮城県生活支援コーディネーター応用研修

<応用研修3 生活支援コーディネーターによる実践報告&事例検討会>

【仙台会場①】7月28日（木）太白区中央市民センター

講師：高橋 誠一（東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授）、大坂 純（仙台白百合女子大学 人間学部 教授）、志水 田鶴子（仙台白百合女子大学 人間学部 准教授）ほか

平成28年度 岩手県高齢者等サポート拠点職員等研修事業

<支援を深めるための基礎研修> 【釜石会場】7月19日（火）～20日（水）釜石・大槌地域産業育成センター
講師：永坂 美晴（明石市望海在宅介護支援センター センター長）、岩城 和志（淡路市社会福祉協議会 兼 地域支えあいセンターいちのみや センター長）

<仮設住宅等からの移行期における対応（仮設住宅編）>

仮設住宅に暮らす住民・要介護者等への対策～取り残される不安感～

【釜石会場】8月1日（月）釜石地区合同庁舎 【陸前高田会場】8月2日（火）陸前高田市コミュニティホール
講師：永坂 美晴（明石市望海在宅介護支援センター センター長）

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ（地域づくり）から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

44号の特集「若者と社会をつなぐ」を興味深く拝読しました。紙面に取り上げられていたような活動で、若者たちが社会とのつながり方のコツをつかんでくれることを期待しています。その後は地域で活躍するもよし、世界に羽ばたくもよし。幸せな人生を歩んでいただきたいものです。行き場がなく不安を抱えた若者たちを地域が支える取り組み、ぜひもっと色々なところに広まってほしいです。（仙台市青葉区S・Nさん）

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください！

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737

E-mail johoh@clc-japan.com

編集後記

今月号16ページ掲載の「南三陸町戸倉地区災害公営住宅」では、隣接する小学校や保育園の運動会や発表会が、住民のみさんの楽しみの1つになっているそうです。散歩のあいまに、校庭での練習を見学しに行く人もいるとか。一生懸命な取り組みで地域のみさんに元気を与える姿に、改めて「子は宝」だと感じました。（吉成）

バックナンバーがホームページで読めます！
http://www.clc-japan.com/sasaesai_j/